



國の支え

中井信夫元大阪府議会議長

国防は最大の
福祉である
初代会長 高橋季義

関防会歴史勉強会

中島サロン

第59回

2月20日

エネルギーをミサイル弾頭などの一点に集中して破壊するための兵器は、総称して指向性エネルギー兵器と呼ばれている。レーザー以外に電磁パルス、レーザガンなどを利用した兵器が研究開発され、一部は実用化されている。

1 指向性エネルギー兵器による各種ミサイルの無効化

高出力レーザー兵器、電磁パルス兵器、レーザガンはともに、指向性エネルギー兵器と呼ばれている。高出力レーザーは工業用では溶接、切断、低出力のもの通信などに使われている。軍用の場合は大気中の減衰を抑えて遠距離まで高エネルギーを届けなければならぬ。現在は1000kW級が試験中で、数km以内の無人機、小型のボートなどを無力化できる段階に達している。

電磁パルス兵器は現在のレーザの出力を倍加し、かつそのエネルギーを電子的に走査して突入してくる弾道ミサイルの弾頭部に集中することにより、その内部の電子部品等の性能を破壊し機能マヒさせるというものである。電子的なレーザビームの走査はフェイズド・アレイ・レーザと同じ原理であり、この点では日本は先進的な技術力を持っている。

レーザガンは、リニアモーターカーと同じ原理で、電磁誘導により砲弾を加速し、従来の数倍以上の

エネルギーで打ち出し、直接敵のミサイル弾頭に命中させ破壊する兵器である。米軍ではすでに従来の戦車砲の3倍程度のエネルギーを持つレーザガンが開発され、近距離防衛用の兵器として艦艇に搭載し試験されている。

これらの指向性エネルギー兵器が実用化されれば、飛来する弾道ミサイルの弾頭でもほぼ確実に着弾、起爆前に破壊す

る。第一に核抑止機能に重大な影響を与える。各種の核ミサイルがほぼ100%撃墜可能になれば、現在は核大国だけが持っている「防ぎようのない核攻撃の破壊力への恐怖により相手国の我が方にとり好ましくない行動を思いとどまらせる」

から3千キロ以内の洋上を狙える各種のミサイルを何段にも配置し、米空母などの接近を遅くさせあるいは阻止しようとする「接近拒否戦略」もその威力を失うことになる。日本など東アジアの米同盟国は、自立的に中国の核脅威に對し対処できる能力を持つ可能性が出てくる。

国際政治構造も大きく変化する。核大国の核兵器を背景とする圧倒的な軍事的優位は、大きく削がれることになる。核を保有する5大国が常任理事国を務める

つ国は、軍事的にもかなりの優位に立てるようになる。これは、二重の意味で有利に作用する。まず、防衛ゾーンとして広大な海域を利用でき、直接国土に達するかなり前方からミサイル等を迎撃できる。そのため、奇襲を受ける恐れが減少し、国土戦の不利が緩和される。

また、海の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

これらの利点を生かすために、指向性エネルギー兵器を配備した海上メガフロートのネットワークを領海内に建設することも検討すべきだろう。

以上のようなシステムを支える科学技術水準全般について、日本の水準を高度に保つことができれば、安全保障における科学技術面での優位性が確保でき、周辺国の脅威をより効果的に抑止することができる。そのため、国家安全保障の観点から科学技術戦略を立て、組織的な情報活動、研究開発、運用研究に国として組織的計画的取り組み、イノベーションに対応した安全保障の戦略と政策を創り出さねばならない。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

ポスト核時代のレーザー兵器の現状と展望

高出力レーザーの新技术とその戦略的影響

拓殖大学客員教授 矢野 義昭(元陸将補)



このように、核兵器による抑止機能が大きく低下することになる。ただし、都市攻撃などによる大規模な耐え難い損害を与える能力は核戦力以外にはなく、大量集中攻撃に對し指向性エネルギー兵器が飽和状態になるおそれもないとは言えない。また、ミサイルに防御機能を持たせることも不可能ではない。そのため、指向性エネルギー兵器が配備されるようになっても、核抑止が完全に無効になるとは言えない。

また、大国の圧倒的な抑止力が機能しにくくなり、かつ防衛側がより強力になることから、全般的に戦争が起りやすくなり、かつ長期化するかもしれない。核時代には抑止されてきた大国間の直接の紛争や戦争も起るようになるであろう。逆に、核を持たない国々の意味で核兵器は依然として決定的な抑止力であり続けるであろう。

政治構造の根本的な変革を与える。中国が追求している、100%に近いミサ

び宇宙空間での警戒監視システムの展開も必要である。これらのシステムへのエネルギー供給システムとして、宇宙空間で太陽光発電を効率的に行い、その電力エネルギーを高出力レーザー、マイクロウェーブなどで送り、無人機、洋上警戒監視システムなどを駆動させるシステムの開発も必要である。

これらのシステムの中核となる有人の指揮・司令センターを、地下、海中など秘匿性と残存性に優れた場所に設けなければならぬ。その際、ISRあるいは指向性エネルギー兵器システムと指揮統制・通信・コンピューター(C4)ネットワークの接続をどう確保するかも、重大な課題になる。指揮・指令センターの移動間の防護、通信確保も必要である。

今後技術革新はますます加速する。指向性エネルギー以外にも、コンピューターサイエンス、ロボット、ドローン、IT通信、ナノテクノロジーなど、将来の軍事技術と安全保障戦略に革命的影響を与える可能性のある、軍民両用の先端分野は多い。

これらの先端分野について、国家安全保障の観点から科学技術戦略を立て、組織的な情報活動、研究開発、運用研究に国として組織的計画的取り組み、イノベーションに対応した安全保障の戦略と政策を創り出さねばならない。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

また、海防の障壁により、特殊部隊やテロリストによる核などの持込に対し、水際で防ぐことが、地続きの国境を持つ国よりも容易である。ただし、そのためには国境管理、離島も含めた周辺海域、領域に対する警備能力を高めなければならぬ。

第19回 定時総会のご案内

日時 平成28年4月24日(日)
13:00受付 14:00開会

会場 ホテル・グランピア大阪
大阪市北区梅田3-1-1
(JR大阪駅直上20階)

講話 伊藤俊幸氏
(前海上自衛隊呉地方総監・海将)

演題 15:00開始
安全保障法制成立後の自衛隊の役割

懇親会 10000円
17:00~19:00
当日会場受付で申し受けます
講演聴講だけの方は1000円



運命は人と人をつなげるが人と歴史も結びつける。今年3月に大阪で「ウクライナ・ウィーク2016」を開くことが決まり、親友のアンドレイ君とその打ち合わせをした。思い連絡を取った。「タイでミーティングをしないか」とアンドレイ君が思いがけない提案をする。ウクライナ初の国費留学生として来日したアンドレイ君は、山口大学を始め早稲田大学、京都大学、京都大学大学院で学び、経済博士号を取得。現在は、ウクライナでその才能を活かして活躍している。

泰緬鉄道でウクライナを思う

日本ウクライナ文化交流協会会長
ドニエプル出版・東大阪新聞社社長
大手前大学非常勤講師

小野元裕 (46歳)

アンドレイ君との出会いは11年前に遡る。日本ウクライナ文化交流協会設立のため、2005年1月に私はウクライナの首都キエフへ赴任した。赴任しすべくキエフの街角でアンドレイ君と出会った。彼は日本からちょうど帰国したばかり。日本からウクライナへ行った日本人と日本からウクライナへ帰ったウクライナ人が出会い、馬が合って仲良くなった。

この縁を取り持ってくれたのは、昨年キエフで客死した伝説の言語学者平湯拓先生だ。上智大学でロシア語を学んだ平湯先生はロシア語通訳として活躍すべく夢に胸を膨らませていたが、運命のいたずらで、鹿島建設から語学の才能を認められ、東ドイツに赴任。そこで通訳として活躍する。男気があり、しかもユーモアたっぷりな性格で、恋多き日々を送る。そんななかで、ロシア人の音楽家と恋に落ちる。しかしながら、その恋はKG Bによって引き裂かれること……。

場所をいろいろと探してくれた。決定したが、チャンネル島だ。日本のガイドブックには載っていない。しかし、アンドレイ君がすすめるので、間違いないだろうと安心して、タイへ出発。エアアジアという格安飛行機で関

西空港を飛んだ。1人往復5万円、夫婦で10万円。

夜中0時過ぎに関西空港を飛び、バンコクのドンムアン空港に早朝4時着。バンコクは日本よりの2時間遅れているので、6時間のフライトだ。空港でタクシーを拾い、アンドレイ君に教わった通り、バックパッカーの「聖地」であるカオサン・ロードに着く。朝一番にレストランが開くホテル「ランブリット・ヴィレッジ」へ。フロントでしばらく待つと、朝6時にレストランがオープン。ヨーロッパからの旅行客でいっぱい。バイキング形式の朝食なので、大皿に次々と食事を盛る。タイへ来るまで胃痛で倒れこんでいた妻を見ると、私以上に皿に食事を盛っている。転地療法だろうか、妻の顔色がいい。テーブルに着くと、妻はバクバク食べている。胃痛はすっかりよくなっているようだ。

食事を終え、ホテル近くの小さな旅行会社へ行き「チャング島へのバスはありますか」と尋ねると、青年が「オッケ、オッケ」と明るく対応してくれる。提示されたお金を渡すと、指先がない手で受け取る。驚いた私に気付いたのか、彼はさらに明るく「オッケ、オッケー」と笑顔で私の目を覗き込んだ。

おじさんは「あなたたちは運が良いよ。2席空いていてよかったですね」と言いながら見送ってくれた。バスもヨーロッパ人だらけだ。斜めに座っているイギリス人2人組がいかつい。ガ士級の体格で、体じゅうに刺青が入っている。タンクトップと短パンなので刺青がよく目立つ。年齢は60前だろうか。しゃがれ声でニタニタしながら話しかけてくる。妻は完全に怯え、私にしがみついている。「バスから降りた途端、ピストルで撃たれたらどうしよう」と泣きそうな声で言う。「撃たれたら痛いだろう」と冗談を言うと、妻は震え上がり目を閉じた。

の場で調理してくれる。アツアツを口に入れると、新鮮な食材とスパイスが絡み合い、口の中で乱舞する。ヨーロッパからの旅行客が多いからだろう、料理はどれも洗練されている。あまりの美味しさに、次々と注文してしまい、テーブルは溢れんばかりだ。

実際は何もなく6時間かけて港へ到着。しばらく待って、フェリーに乗り込む。古いフェリーだ。船全体が錆び付いていて、老朽化がひどい。

船が出て、風に当たっていると、心地よい。船の古さも忘れ、船内売店でアイスティーとポテトチップスを買って、ほおぼる。店員は可愛らしい服を着て化粧をしているが、明らかに男性だ。喉仏があり、鼻の下にうすうす

クワイ河鉄橋に立つ筆者



と鼻が生えている。異常なほど艶かしい店員から買ったアイスティーとポテトチップスは異国の味がした。

1時間ほどしてチャング島に到着。乗合タクシーに1時間ほど乗って、アンドレイ君との待ち合わせのホテルに到着。アンドレイ君、奥さんのターニャ、もうすぐ6歳になる娘ヴェターナが迎えてくれた。半年ぶりの再会。固い握手をして、ハグ。

彼らは1週間ほど前にタイに来ており、方々を探してチャング島で一番美しい景色が見えるホテルで待っていた。着いたときにはもう日が暮れていたが、ホテルの中にあるプールでひと泳ぎしてから、野外レストランへ。店先には獲れたての海の幸が並べられてある。選ぶと、そ

でに数人乗っている。3時間かけてカーンチャナブリーに到着。犠牲者の墓参り、戦争博物館へ。展示物を見たり、説明文を読みながら泰緬鉄道について再考する機会を得た。

「タイはこれが最高ですよ」と言いながら、ターニャは椰子の実に突き刺したストローからジュースを吸っている。飲ませてもらうと、うっとりする味。妻も気に入って、椰子の実を追加注文した。

食事をとりながら、「ウクライナ・ウィーク2016」のミーティングをした。アンドレイ君は「典型的なウクライナ文化を紹介するのはなく、もっと掘り下げて本当のウクライナ文化を紹介する時が来たよ」と口火を切った。私も同じことを考えていた。日本ウクライナ文化交流協会を設立して今年で11年。これまでは典型的なウクライナ文化を紹介してきた。ところで、もっと掘り下げて、ウクライナの今を紹介したいと思うようになっていた。チェルノブイリ30年、福島5年という節目なので、もっともっと生のウクライナを日本に紹介したい、という内容を話す。アンドレイ君は喜んでくれた。

ミーティングが終わると、次の日からはバカンスを楽しむことに。朝から海へ入り、夕方までゆっくり泳いだ。水がスーパのように温かく柔らかで、長く浸かっていると寒くない。それどころか、心地よい。

チャング島3日目は象に乗ることにした。チャングとタイ語で象を表す。通りでこの島には象が多くいる。象は実に賢い動物だ。私たちを乗せて、森の中をゆっくりゆくり歩く。背中に乗っている私たちの息遣いに合わせながら。

私たちの前を歩く象の背中に乗っているイタリア人がサングラスを落とした。すぐに象は気付き、鼻を長く伸ばしてサングラスを拾い、乗客に渡す。その見事さに思わず手を叩いた。

チャング島4日目はボートで無人島巡り。半日かけて4島を巡った。エヌラルドグリンの海、どこまでも青い空。シュノーケリングすると、色とりどりの魚たちが自由自在に体をくねらせながら泳いでいる。龍宮城の世界が目前に広がる。いつまで見ても飽きない。

チャング島滞在の記録をフェイスブックにアップし続けていると、私の職親である新風書房の福山琢磨社長から書き込みがあった。「せっかくタイへ行っているのなら、泰緬鉄道に乗ってきませんか」。その書き込みを見たとき、新風書房に編集したミカール・ブルック著・小野木洋之訳「クワイ河の虜」(新風書房)を思い出した。そして、チャング島滞在を1日削り、泰緬鉄道に乗ることにした。

海上自衛隊 阪神基地隊開隊記念日
28年5月21日(土)
場所 神戸市東灘区 魚崎浜町37番
電話 078-441-1011
※詳細は上記基地隊にお問合せ下さい

とここで、タイへ出発する半年ほど前、スターチャンネルで映画「レイルウェイ 運命の旅」(ジョン・サン・テプリツキー監督)を夫婦揃って偶然に観た。真田広之主演の重い映画だったが、引き込まれた。初めは泰緬鉄道を扱った作品だと分からなかったが、ストーリーが展開するうちに気付いた。戦争博物館を見学していると、ふとこの映画の場面場面が脳裏に蘇った。

三人の陸軍大将



一般社団法人
大阪府警備業協会
専務理事
原田光生

第一章 「わづらひ」

1 世界は今

思えば、あの未曾有の悲劇であった第二次世界大戦が終わってから71年になる。大戦後、国際連合が設置されて世界平和が唱えられてきたが、その後も世界は争いが絶えない。振り返ると米ソの冷戦下、一例を挙げても「中東戦争(6次)、朝鮮戦争、印パ戦争(3次)、ベトナム戦争、中越戦争、イラン・イラク戦争、フーランド紛争、イラク戦争、アフガニスタンの内戦、湾岸戦争、ユーゴスラビア紛争、シリア内戦とイスラム国との戦闘」等、いまだに争いは絶えない。しかし、今世界は再び激動の時代を迎えている。ヨーロッパでは、シリアの内戦やアフリカの貧困等により、中東やアフリカから大量の難民が押し寄せ、英国は、EU離脱に関する国民投票を模索するなど、ヨーロッパでの分岐危機を招いている。また、シリアの内戦は、イスラム国の台頭を招き、米英仏対ロシア、対トルコ、国内にシムクルド民族の存在など、複雑多岐な様相を呈し、新たに「イランとサウジアラビア」の対立も危惧される。また、ロシアはクリミア半島を併合し、ウクライナ東部で依然として覇権を強めている。一方、目をこの東アジアに向けて見ると朝鮮半島では、北朝鮮が核とミサイルの開発を一段と強め、水素爆弾と称した核実験の強行、大陸間弾道弾の発射などから、国連制裁の強化もあって38度線での緊張が高まっている。

しかし、一番懸念されるのは中国の軍事力拡大と覇権主義である。中国の覇権は拡大しつつあり、南シナ海における岩礁の埋め立てと領有権の主張、滑走路の設置と地対空ミサイルや戦闘機の配備など、軍事基地化を着々と進めている。我が国にとって南シナ海は最も大事なシーレーンであり、この確保に、将来重大な影響を与えかねない現状となっている。これに対しアメリカは「航行の自由作戦」と命名した艦船の派遣を行っており、米中の局地的衝突が懸念されている。さらに我が国との関係では東シナ海の尖閣諸島領有権をめぐる、中国は巡視艇の大型化、武装の強化を図って、領海侵犯を繰り返しており、不測の事態が発生しかねない現状となっている。このように中国は、確信的利益の名分のもと着々と覇権を強化し、戦後世界の秩序を破壊し領土拡張を企図している。あたかも、明治「日清戦争」以前に、清の北洋艦隊主力艦「定遠、鎮遠」が長崎港に入り、日本を

威嚇した帝国主義の時代に逆戻りしたような感がある。我が国の防衛は明治以降、朝鮮半島をめぐる覇権の争いであつた。日清、日露の戦いは、まさに朝鮮半島をめぐる戦いであつた。今はアメリカがその役割を担っている。朝鮮戦争を経験したアメリカは、当時中国(中共軍)は出てこないと考えていた。しかし、旧日本軍のある参謀は必ず中国軍は出てくると助言した。古くは「唐新羅連合軍」対「百濟遺民日本軍」の「白村江の戦い」、秀吉の「朝鮮出兵(文祿・慶長の役)」と「明・李氏朝鮮連合軍」との戦い、東学党の乱の平定をめぐる日本・清の朝鮮派兵と日清戦争、そして朝鮮支配を目標としたロシアとの日露戦争など、歴史が証明している。朝鮮戦争でも案の定中国の介入を招いた戦いに発展して、今の38度線で停戦している。この現実、あのマッカーサー元帥も初めて気づいた。「太平洋戦争は、日本の自衛の戦いであつた」と彼は言っている。歴史は繰り返されている。

2 戦後日本人の国防感覚

しかし、私が一番危惧しているのは、私達日本人の国防に関する意識である。戦争は絶対にやめてはいけない。あの悲惨な戦いから学んだ我々日本人一人ひとりの願ひである。しかし、戦後世界の歴史を見ても、生物の生存競争と同じように争いは必ず起きる。この地球上の生あるものがお互いに生きていく以上、地球上の生物である人類においても必ず争いは起きる。

同じ民族同士でも、国内的には警察という組織があり、国民の生命、身体、財産の保護に当たっている。反面国際間では、軍隊という武装集団がないと対抗出来ない。民族の自決、自尊のための軍隊は絶対必要である。韓国の李承晩は、戦後のドサクサの間隙をついて「竹島」を自国領土と主張し困り込んだ。これが戦前であれば、旧ソ連との間で発生した張鼓峰事件(1938年)やノモンハン事件(1939年)をみてもわかるように、日韓間の国境紛争になっていたであろう。独立国における領土、領海、領空とはそういうものである。しかし、悲しいかな戦後の我が国には軍隊がない、交戦権がない。いや、それよりも最も情けないのは、「領土、領海、領空は、国家・国民が絶対に死守すべきものである」という意識と国家感がない。そのような国であるから、北朝鮮による自国民の拉致問題も発生したのである。重ねて言うが、歴史は繰り返す。今の日本は丸裸であり、アメリカの庇護のもとにある。自国の護りを他国に依存する国は内部から崩壊する。国民の意識の変化から崩壊する。しかし、今の日本がどうして保っているのか、またまた日本人の一部の指導者、国民の中に、本当に危機感を持

ちこれではいけないという国家感を持っている人がいることである。国防は、今の自衛隊だけで出来るものではない。自衛隊に対する強い支持と、自らの国は自らで護るとの気概を国民一人ひとりが持つことである。明治の人々には、老若男女を問わずあふれるほどの国防への気概があつた。今の日本人の、青年層や、為政者である一部政治家の中に、なんと国防意識のない人が多いことか。自らの国を自らで護るという気概は微塵も伺えない。かつての李氏朝鮮は、文官を優越し両班が武官を卑下して国を滅ぼした。国家というものは、国益によって動く。憲法前文や9条、国際連合によって国家が護られるものではない。今も国際間は、各国の国益で動いている。武を卑下し、国防を軽視する今の日本は、かつての李氏朝鮮のよう気がしてならない。このような危機意識から、このたび「明治、大正、昭和」にかけて軍に籍を置き、その命を国家に捧げ部下の兵とともに戦塵を潜り抜けて抜群の功を挙げながらも、一人の人間として生きた「三人の陸軍大将」の生涯と、その当時生きた人々の国を護る気概について掲載してみた。一読していただければ幸いです。

第二章 「三人の陸軍大将」

1 陸軍大将とは

旧日本軍の軍政構想は、明治2年に長州藩出身の大村益次郎により、薩長土の武士からなる天皇の「御親兵」が組織され、その後明治4年に「鎮台」が置かれた。さらに、明治6年には国民皆兵の「徴兵令」が敷かれ、全国6鎮台が確立された。その後、秋の乱、熊本新風連の乱、西南戦争を経て師団制が敷かれ、富国強兵の政策のもとに軍備の強化が図られ、外征が出来うる軍隊へと姿を現していった。このような旧陸軍で、最高の階級(元帥は別)である大将への階級に上り詰めた人は、初代の「西郷隆盛」から最後の沖繩戦で戦死した「平島満」まで、134名いる。私は何も大将だから偉いというのではなく、まず何よりも時代の先見性を持っていたか、軍人としての指揮能力はどうか、将官としての責任の取り方、兵に対する人としての接し方、人間的魅力、バランス感覚などから三人の陸軍大将を選んだ。その三人は、いずれも薩長閥でのし上がった人ではない。持ち前の人柄、卓越した能力、軍人としての高い指揮能力、兵を愛する人物であつた。その一人は、幕府の桑名藩出身の「立見尚文大将」、二人目は、会津出身の「柴五郎大将」、最後の一人は、仙台出身で昭和の聖将と言われた「今村均大将」である。その他、日露戦争を終始指導し和平に導いた、長州徳山藩士の児玉源太郎大将や、旅順攻撃の際、一戸堡壘で有名をさせた青森弘前藩士の二戸兵衛大将などがあるが、今回は、前記に挙げた三人を取り上げ、その人となりや、その功績、逸話などを紹介して、今の日本人が忘れ去ったもの、見失っているものを掘り起こし、今一度「国家と国防」というものを考えてみたいと思つた。

立見尚文は、1845年(弘化2年)、江戸で生まれている。代々三重県桑名藩士で、幼少の頃は「町田鑑三郎」と命名されていたが、三男であつたことから、同じ桑名藩士の叔父である立見家に養子に行き、「立見鑑三郎」と名乗り、後、「立見尚文」と改名している。彼を有名にしたのは戊辰の役で、徹底して薩長の維新軍と戦い、特に桑名藩一番隊「雷神隊」の隊長として常に勝利している。しかし維新後判事となつていた彼が再び軍籍に返つたのは、西南戦争の勃発であり、彼は陸軍少佐として従軍している。その後少将で日清戦争に従軍、師団長に昇進しているが、あの「八甲田山死の彷徨」で有名になった「青森歩兵第五連隊」の、雪中行軍遭難時の青森第八師団長であつた。その後日露戦争では、ロシア軍の冬期攻勢はないと言われていた時に、ロシア軍が大挙攻勢に出た「黒溝台」の戦いにおいて、師団の半数を失いながら彼の師団と秋山好古の騎兵連隊でこれを食い止め、満州軍の崩壊を防いだ。続く奉天会戦を戦い凱旋している。彼は常に第一線で指揮し、「戊辰の役」から負ける戦をせず、常勝將軍と言われた。



(1) 立見尚文大将

立見尚文は、1845年(弘化2年)、江戸で生まれている。代々三重県桑名藩士で、幼少の頃は「町田鑑三郎」と命名されていたが、三男であつたことから、同じ桑名藩士の叔父である立見家に養子に行き、「立見鑑三郎」と名乗り、後、「立見尚文」と改名している。彼を有名にしたのは戊辰の役で、徹底して薩長の維新軍と戦い、特に桑名藩一番隊「雷神隊」の隊長として常に勝利している。しかし維新後判事となつていた彼が再び軍籍に返つたのは、西南戦争の勃発であり、彼は陸軍少佐として従軍している。その後少将で日清戦争に従軍、師団長に昇進しているが、あの「八甲田山死の彷徨」で有名になった「青森歩兵第五連隊」の、雪中行軍遭難時の青森第八師団長であつた。その後日露戦争では、ロシア軍の冬期攻勢はないと言われていた時に、ロシア軍が大挙攻勢に出た「黒溝台」の戦いにおいて、師団の半数を失いながら彼の師団と秋山好古の騎兵連隊でこれを食い止め、満州軍の崩壊を防いだ。続く奉天会戦を戦い凱旋している。彼は常に第一線で指揮し、「戊辰の役」から負ける戦をせず、常勝將軍と言われた。

(2) 柴五郎大将



柴五郎は、1860年(万延元年)、会津藩士の五男六女(2人夭折)の五男として、会津若松市で生まれた。おりしも彼が10歳の時、明治維新の「戊辰の役」は、戦火を会津若松城にまで広げ、会津若松城における籠城戦で、祖母、母、兄嫁、姉妹の5人は自刃し、また、男兄弟では、次男「謙介」を失うなど、長男「太一郎」、三男「五三郎」、四男「四朗」と五男の「五郎」の兄弟、そして父親の男ばかり5人がかろうじて生き延びた。その後、会津藩の新領地である「斗南藩」領地に行き、飢饉地獄の苦勞の末「青森県庁の給仕」となるも青雲の志を忘れられず、上京して奇食等を重ねながら「陸軍幼年学校」に入り、軍人への道を歩みはじめた。柴五郎は、いわゆる支那通として活躍しているが、とりわけ彼が世界に名を轟かせたのは義和団の事変により、映画「北京の55日」で有名になつた「北京籠城時」の活躍である。この時の柴五郎砲兵中佐(リュウトナンコノネル・シバ)の卓越した指揮と、日本軍兵士の勇敢さ、規律の正しさは、籠城した各国人や、兵、避難民の称賛の的となり、とりわけ各国のまごめ役であつた軍人出身の英国公使、「クロード・マゴドナルド」をいたく感心させ、日本人は信用できる民族であるとして、後日、日本公使・大使となつた彼をして日英同盟締結の原動力となり、日露戦争の勝利へと繋がっている。

今村均は、1886年(明治19年)、裁判所判事の次男として仙台市で生まれている。その後父の転勤に伴い、山梨県、新潟県新発田市などに移り住んでいるが、彼が軍人への道を歩みはじめたのは父の死が契機であつた。旧制中学卒業後、「高か東京高商」が希望であつたが、日清戦争後の台湾征討時、戦傷死した陸軍大尉の娘で、子沢山であつた母の強い希望もあり、学費のいらぬ「陸軍士官学校」に進んで軍人への道を歩んだ。彼の人生は、終始「至誠一貫」の人生であつた。軍人としては、第五師団長時代の、支那事変における蒋介石の印からの援將ルート遮断を企図した「南寧の戦い」、大東亜戦争におけるオランダ領「インドネシアの攻略と濃厚な軍政」、第八方面軍司令官となつてからの「ガダルカナル島撤退作戦」と「三バウル自活籠城作戦の指揮」、「戦後の指揮官としての責任の取り方」などにある。彼は戦犯抑留中に「一軍人六十年の哀歓」と題する、生い立ちからの手記を記している。この手記には、当時の日本人の生きざまが克明に記されている。今でも、各界リーダーの隠れたベストセラーであるという。私も感銘を受けた一冊である。(以下次号に続く)

今村自書の「敬天愛人」の額

今村均は、1886年(明治19年)、裁判所判事の次男として仙台市で生まれている。その後父の転勤に伴い、山梨県、新潟県新発田市などに移り住んでいるが、彼が軍人への道を歩みはじめたのは父の死が契機であつた。旧制中学卒業後、「高か東京高商」が希望であつたが、日清戦争後の台湾征討時、戦傷死した陸軍大尉の娘で、子沢山であつた母の強い希望もあり、学費のいらぬ「陸軍士官学校」に進んで軍人への道を歩んだ。彼の人生は、終始「至誠一貫」の人生であつた。軍人としては、第五師団長時代の、支那事変における蒋介石の印からの援將ルート遮断を企図した「南寧の戦い」、大東亜戦争におけるオランダ領「インドネシアの攻略と濃厚な軍政」、第八方面軍司令官となつてからの「ガダルカナル島撤退作戦」と「三バウル自活籠城作戦の指揮」、「戦後の指揮官としての責任の取り方」などにある。彼は戦犯抑留中に「一軍人六十年の哀歓」と題する、生い立ちからの手記を記している。この手記には、当時の日本人の生きざまが克明に記されている。今でも、各界リーダーの隠れたベストセラーであるという。私も感銘を受けた一冊である。(以下次号に続く)

陸上自衛隊 第3師団創立55周年 記念行事御案内

日時 5月15日(日)午前9時から
観閲式 10:20開始
場所 陸上自衛隊千僧駐屯地 伊丹市広畑1-1
電話 072-781-0021
*詳細は上記駐屯地へお問合せ下さい

陸上自衛隊 第37普通科連隊 創立59周年記念 行事の御案内

日時 4月24日(日)9:00から
場所 信太山駐屯地 和泉市伯太町官有地
電話 0725-41-0090
備考 JR信太山駅より送迎バスあり
*詳細は上記駐屯地へお問合せ下さい。

ナノで吸収率5倍

沖縄もすぐ抽出エキス「フコイダン」
楽天1位の大人気商品



ココロ・カルフ
フコイダンライフ・ナノ

ナノカプセル化フコイダン配合
フコイダンライフ・ナノ
18,900円+税、1.2g×60包入

美容と健康の
ビー・エイチ・ラボ
http://www.rakuten.co.jp/bh-labo/
0120-919-704
〒553-0006 大阪市福島区吉野4-19-10

米軍の希望者を招いて昼食を供して歓談する、これがステレオタイプである。来訪者はスコット・ギルガン氏(カリフォルニア州)ニモード・シユプリンクル氏(ワシントン州)の2名

ホームビジットとは、日米合同指揮幕僚訓練で来日した米軍兵士を日本人家庭に招いて、その労をねぎらうもので、私は陸上自衛隊中部方面総監部から受入れを打診されて、今回が4度目の受け入れとなる。

平成27年11月12月に実施された指揮訓練名「YS69」である。自衛隊員4500名、米軍二千名が参加して、あの広い中部方面総監部敷地内全域にテントを張り食事も風呂もテントの中で野戦なみの生活であった。

ホームビジット 訪問を受けて

常任理事 赤阪昇三



左端が赤阪氏

短い時間だったが、寿司、天麩羅、ビール、ワインなどを勧めた。お一人はベジタリアンで魚介系はほとんど口にできなかったが、のり巻き、野菜の天麩羅、ゴマ豆腐などはOKだった。いつもの感じだが、アルコールには余り手を出さなかった。

花札のルールペーパーを片手に持ち八八(はちばち)を楽しむ、この札と浮世絵などをプレゼントし、彼らからもお返しがありアツと言いつつ時間が経ちお開きとなった。歓談中彼らの職種を聞いたら一人はエンジニア(工兵)、もう一人はMortnal Affair(戦死者慰霊班)と言われたのに驚きつつ、成る程と感じた。これは現実の問題として必要なことである。これまでよりザブザブ(予備役)の人が多かったが、今回はお二人共アクティブ(現役)だった。お二人の名前を漢字に当て嵌め、色紙にしたためて進呈した。

スコット・ギルガン(義留殿・崇古都ニモード・シユプリンクル)寿富琳・仁毛道

余談だが日本陸軍にも屍衛兵という役割があった。戦死者を出した中隊などで死者を茶毘に付すまで一晩中警護する、これが屍衛兵である。転じて屍とは葬送するまでの死体である。自衛隊にもあると思うが耳聞にして聞かない。禁句になっているのだろうか?。満州事変の時に作られ軍歌「眠れ戦区」の歌詞に呼べど還らぬ遺骸を囲みて今宵夜もすがら 尽きぬ名残を惜しむかな 眠れ戦友安らかに ああ戦いは勝ちにけり」があり、衛兵勤務の哀感漂う名曲だろう。

練習艦隊歓迎の夕べ(3月21日)

歓迎の夕べで士官らと記念撮影する関防会員



挨拶する練習艦隊司令・岩崎英俊海将補



大阪港に寄港した「かしま」と新任の3等海尉(少尉)



檀原神宮にて関防会員(紀元節・2月11日)

後編 集記

*矢野義昭氏のレーザー兵器の開発と将来展望を興味深く聞いたが、科学また化学に弱い者にとっては、夢のような話だった。核弾道ミサイルを撃ち落とすレーザー兵器の第一人者と言うことで氏に講師を依頼したが、予想上回る参加者を得た。それだけ皆様方が我が国の防衛に危機を抱いている証しであろう。専守防衛という縛りを受けて敵基地攻撃もままならぬ、また核兵器開発がタブーとなっている我が国にとって、核兵器を無力化するレーザー兵器の開発は切望するもので、何とか世界に先駆けて先行開発を願いたい。

この歌会始に柳澤忠麿大阪護國神社宮司と徳川康久靖國神社宮司が召され宮中に参内されている。靖國神社に次いで全国の護國神社で最も多い10万5千余柱の英霊をお祀りする大阪護國神社は、社格において宮中に召されるに不思議はない。そうして昭和天皇・香淳皇后、今上陛下・皇后陛下(皇太子・向妃殿下御時)を始め、各宮殿下のご参拝が21回を数える大阪護國神社の宮司が、靖國神社の宮司と並んで宮中に召される事も許されるものだ。しかし、それが慣例となっていない現状を考察すると、優詔(天皇のねんごるな仰せ)が発せられたとしか考えられない。弊会の激戦地での恒例となつてはいる慰霊祭は柳澤宮司による厳粛丁寧な慰霊祭であり、在外公館の参列さ

天覧の栄に浴したかも???

*「戦場にかける橋」という映画を観られた方もあろう。「クワイ河マーチ」で有名だが映画のクワイ河鉄橋というのは実在しない、今の物は観光のための作爲的なものである。だがそのモデルは日本軍が建設した「泰緬鉄道」である。タイ(泰)のシンガポール線(ノンブドック駅と英国のイェビルマ(現ミャンマー)間の鉄道輸送の重任を果たしている。日本軍は戦場であった東南アジアに後世に役立つ事業も残している。その代表例が泰緬鉄道で、その見学記を小野元裕氏に寄稿してもらった。

今年の歌会始の御製「戦ひにあまたの人の 失せしといふ 島緑にして海に横たふ」は昨春天皇皇后両陛下が彼の島を行幸啓された時の情景を詠まれたものである。

新年のご挨拶



玉碎の島 ベリリュウ島を慰霊訪問 平成27年11月13~16日

自主憲法制定を急げ

第61回

関防会の歴史勉強会 中島サロンのご案内

日時 平成28年6月18日(土曜日) 午後4時から
講師 高橋孝途氏(徳島文理大教授・元海将補・故高橋会長次男)昭和34年・西官市生、防衛大学26期、「しまゆき」艦長などを経て平成5年「ときわ」航海長としてペルシャ湾掃海派遣に参加、約10年間の海上勤務。米海軍大学指揮課程修了。
演題 何故・日本の安全保障法制は、かくも複雑なのか
米海軍兵学校の教官を勤めるなど国際法に精通した観点から我が国の現状を語ってもらいます。

会場 錦城閣 ☎06-6941-2185
地下鉄谷町線、京阪電車天満橋駅直上
キャッスルホテル3F(中国料理店)

第62回

日時 平成28年8月20日(土曜日) 午後4時から
講師 江口克彦氏
昭和15年名古屋市生、慶応義塾大学法学部卒、松下電器入社以後23年間松下幸之助氏の下で過ごし、松下哲学、松下経営の伝承者と言われる。参議院議員、経済学博士、枚方市在住
演題 沖縄の基地・日本防衛の観点から考察
松下政経塾創立に尽力され、多くの政治家を育てた裏話など踏まえ日本防衛の在り方を披露して貰います。

会費 5,000円(含む飲食代)
40才未満は3,000円(含む飲食代)
学生は2,000円(含む飲食代)

れた外務省職員は、こんな立派な慰霊祭は例を見ない、と口々に語っている。政教分離を建前とする政府主催の慰霊祭(遺族会を含む)は、神社神道の祭祀長である天皇陛下におかれましては隔靴搔痒の思いをお持ちでは、と憶測する。(新)